

歴史がくないだ大学との絆

丹波篠山市と神戸大学が地域連携を本格的にスタートさせてから20年。大学の「知」と地域の「力」を結び付けながら歩んできた取り組みは、今、新たなステージを迎えています。

丹波篠山市と神戸大学の縁は、農学部的前身である兵庫県立農科大学が1949（昭和24）年から1969（昭和44）年まで、篠山にあったことに始まります。この間、現場での課題を共有し、黒大豆・山の芋の生産販売など、農業分野を中心としたさまざまな課題を解決してきました。

その歴史あるつながりを再び結び直そうと、2006（平成18）年に「神戸大学農学部篠山フィールドステーション」を設置し、翌2007（平成19）年に神戸大学大学院 農学研究科と、2010（平成22）年には神戸大学と地域連携協定を締結し、本格的な連携が始まりました。

広がる大学との連携

地域連携協定締結後は、大学の授業「実践農学入門」を通じて学生が地域へ入り、受入団体であるまちづくり協議会の活動に参加。地域住民との交流をきっかけに、丹波篠山をフィールドとして活動する学生サークルも次々に誕生しました。

また、2014（平成26）年には、全国に先駆けて独自の地域おこし協力隊制度「半学半域型」を創設。学生が地域に暮らしながら、学業や地域活動を両立できる仕組みを整え、若者が地域と継続的につながる新たな流れを生み出しました。

神戸大学との連携は、農業分野にとどまりません。保健学研究科による発達障害児のスクリーニングや、人文科学研究科による地域の古文書整理、人間発達環境学研究科による里山共生講座の開設など、大学の知見を地域課題の解決に生かす取り組みは、広がりを見せています。

未来を創る人材育成

2016（平成28）年には、起業する人材を育成する拠点として、JR篠山口駅に「神戸大学・篠山市農村イノベーションラボ」を開設。農村で新しい価値を生み出して、しごとをつくる人のためのローカルビジネススクール「篠山イノベーションスクール」がスタートしました。

この取り組みは、現在の「一般社団法人丹波篠山キャピタル」（開始時は一般社団法人EKKILAB.）へと発展し、地域全体で人材を育てる基盤づくりへとつながっています。また、神戸大学をはじめ多くの大学や研究者が参画する「丹波篠山研究会」が設立されるなど、本市には多様な知恵が集い、新たな価値を創造する地域へと歩みを進めています。

神戸大学×丹波篠山市

地域連携20年の歩み

そして未来へ…

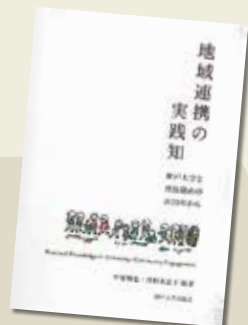
丹波篠山市と神戸大学が地域連携を本格的にスタートさせてから20年。この間、大学の「知」と地域の「力」が出会い、多くの学生や研究者、市民、行政が力を合わせ、地域の課題に向き合いながら、多くの取り組みを積み重ねてきました。

今回は、20年間の主な取り組みや成果を振り返るとともに、関係者の声を交えながら、これからの地域と大学の連携が描く未来について紹介します。

問い合わせ 創造都市課 ☎552-5106

神戸大学と丹波篠山市が20年にわたり築いてきた地域連携の歩みと、現場で培われた実践知をまとめた1冊。

『地域連携の実践知』好評発売中！



神戸大学と丹波篠山市の 地域連携年表

2025年	2022年	2020年	2016年	2014年	2011年	2010年	2009年	2008年	2007年	2006年
丹波篠山研究会発足	（一社）EKKILAB. を丹波篠山キャピタルと名称変更	丹波篠山研究発表会開始	神戸大学・篠山市農村イノベーションラボ開設、篠山イノベーションスクール開講 （一社）EKKILAB. 設立	地域おこし協力隊制度（半学半域型）開始	農業農村フィールド演習、農業農村プロジェクト演習を実践農学入門、実践農学と名称変更	神戸大学・篠山市地域連携協定締結	農業農村プロジェクト演習開始	農業農村フィールド演習開始	神戸大学大学院 農学研究科・篠山市地域連携協定締結	神戸大学篠山フィールドステーションを開設

次の20年へ、 ともに未来を描く

2011年から丹波篠山市に携わらせていただく中で、縁もゆかりもない私に、多くの方がとても親切に接してくださり、感謝しかありません。特に印象に残っていることは、授業を通じて、黒大豆の栽培や、農業農村の知識や技術を教えていただいたことです。

また、一緒に商品開発をしたり、祭りに参加したり、地域の課題についてじっくりとお話を聞かせていただいたりしたことも、代え難い経験になりました。これからも地域の方と共に、ニホンザル等野生動物の管理をはじめとした課題解決に取り組んでいきたいです。

魅力あふれる丹波篠山市を多くの方に知っていただき訪れていただけるよう、大学の授業や研究活動を通じた情報発信にも取り組んでいきます。



神戸大学大学院
人間発達環境学研究科
准教授 清野末恵子さん

神戸大学と丹波篠山市の20年にわたる歩みは、地域の皆さんの受け入れと大学関係者の情熱で築かれた大切な財産です。この20年の歩みは、フィールドステーションの開設、駐在研究員の配置、教育プログラムの実施を始め、農村イノベーションラボの開設、丹波篠山キャピタルの設立、地域おこし協力隊制度の活用など、多様な取り組みを通じて、大学と地域が支え合う連携の基盤が形成されてきました。

現在、地域連携は「成熟期」から「新生期」へと新たな段階を迎えています。これからは、地域の次世代の担い手や若い教員・学生が主体となって活動を継続できる仕組みづくりが重要です。AIやスマート農業が進む時代だからこそ、地域に入り、自然や農にふれながら五感で感じる「身体性」の共有がコミュニケーションの核となります。大学の「知」と地域の「力」を結集し、未来につながる持続可能な連携へ発展していくことを期待しています。



神戸大学大学院 農学研究科
教授 中塚 雅也さん



元地域おこし協力隊 長井拓馬さん

神戸大学生としてフィールド演習やサークル活動をきっかけに福住地区と関わり、地域おこし協力隊としての活動も経て、この地域で就農しました。生物多様性を保全するため、篠山の第一次産業をすべて担う人材になろうと水稻や黒大豆栽培などの農業に加えて、林業や狩猟にも取り組んでいます。今後も神戸大学には、学生が研究を通じて地域と学び合う関係を築いてほしいと思います。

大学と地域がともに歩んだ20年。
皆さんに、地域連携への思いや
とともに、次の20年に向けた



丹波篠山市役所 創造都市課 大西恒輝さん

「学生がまちを歩いてくれるだけで良い」という地域の期待から始まった事業が、20年を経て地域おこし協力隊、イノベーションラボ、起業家輩出などの成果を生み出しました。

今後は蓄積された人材やネットワーク、知恵を接続し、多様な人々が関わり、地域社会を持続可能にする仕掛けにしていきたいと思っています。



真南条上営農組合相談役 酒井勇さん

2008年に神戸大学の学生31人を受け入れました。神戸大学と共同開発したジャガイモを「丹波の赤じゃが」として栽培。北野ホテルのフレンチメニューにも使われました。また、耕作放棄地に加工用梨を植え、「なしシロップ」の販売にも取り組みましたが、組合での受入体制ができず、すべての活動を停止しました。今後は、地元の受入体制の構築化が必要だと思います。

その歩みを支えてきた関係者の
20年の歩みを振り返っていただく
期待をお聞きしました。



大山郷づくり協議会会長 岡田康則さん

今回、神戸大学の学生42人を初めて受け入れました。学生たちは地域に入り、さまざまな農作業体験を通じて、農業の現場や地域の暮らしに触れます。学生の皆さんには篠山の魅力を感じてもらい、若い視点で農業や地域づくりへの新しいアイデアを出してもらえたらうれしいです。これからも大学とのつながりを大切に、地域の活性化につなげていきたいと思っています。

連携20年を振り返り、 フォーラムを開催

6月6日に丹波篠山市民センターで、神戸大学と丹波篠山市の地域連携20周年を記念するフォーラムが開かれました。

1部では、神戸大学大学院 農学研究科の高田晋史准教授が地域連携協定締結の経緯や、締結に基づく活動について報告。その後、丹波篠山キャピタルの谷川智穂さんが、「神戸大学・篠山市農村イノベーションラボ」の概要や取り組みを説明しました。

さらに、「元地域おこし協力隊の菅原将太さんが、「地域のあたたかさ」とフールドステーション駐在員の存在が重要であること」を、堀井宏之副市長

からは、「大学連携がもたらした大きな成果」について、それぞれの思いを語りました。

続いて、「これからの地域連携」をテーマにパネルディスカッションが行われ、これまで連携が続いてきた理由や、今後の課題について意見を交わしました。

地元で農業を営む吉良佳晃さんは、「イノベーションスクールのような『共に地域を考える』場を通じて、実際の仕事や雇用等のつながりが地域に生まれたことは大きい。また、日本、世界中に『篠山で学んだ卒業生』がいるという財産は大学という枠組みがあつてこそ。この場を今後も大切にしてほしい」と期待を寄せました。

神戸大学OBで、学生サークルを立

ち上げた鈴木太郎さんは、「学生が地域に入りやすい受入体制や『いつでも来ていいよ』と迎えてくれる地域の温かさが、活動の継続につながりました」と振り返りました。「今後は、地域の担い手不足や、地域の魅力を次世代へ引き継ぐ仕組みづくりが課題です」と語りました。

元丹波篠山市駐在教員の木原奈穂子さんは、「連携によって地域との信頼関係が築かれ、大学が研究や教育を進めやすい環境が整ってきました。また、学生にとっても農業や農村を実体験で学べ、学生のニーズに応えてくれる貴重な場になっています」と語りました。

NPO法人里地里山問題研究所の鈴木克哉さんは、「学生との交流は、

地域に変化を生むきっかけになっています。地域はもともと、課題解決や活性化において、大学に期待してもよいと思います。そのためには、大学や民間企業をつまく活用するコーディネート人材を育成することが重要です」と、その必要性を訴えました。

市職員の中瀬文隆さんは、「今後は、『地域コミュニティをどう支えるか』についてが重要で、大学には引き続き、専門的な知見の提供を期待していきます」と話しました。

最後に、20年にわたり築いてきた大学と地域の信頼関係を礎に、大学、行政、地域がそれぞれの強みを生かしながら連携をさらに深め、持続可能な地域づくりを進めていくことの大切さを共有しました。

地域医療を守るために ～2病院と医師会が支える、丹波篠山のこれから～

対談者

- 酒井隆明市長
(丹波篠山市長)
- 小嶋敏誠さん
(丹波篠山市医師会会長)
- 余田洋右さん
(医療法人社団紀洋会理事長)
- 井手通雄さん
(医療法人社団みどり会理事長)

丹波篠山市では、7月からささやま医療センターがみどり会へ引き継がれ、新たな地域医療体制がスタートしました。

これまで、兵庫医科大学が地域の中核病院として果たしてきた役割を受け継ぎながら、これからは、救急医療を担うささやま医療センターと岡本病院2つの病院と医師会をはじめとする地域の医療機関が連携し、市民の安心を支える体制づくりが進められます。

今回の対談では、新たな地域医療体制のスタートを迎えた今、今後の体制づくりや地域医療の未来について、それぞれの立場から語り合ってください。

問い合わせ 長寿福祉課 ☎552-5346
健康課 ☎594-1117

医療法人社団紀洋会・余田洋右理事長、丹波篠山市医師会・小嶋敏誠会長、
医療法人社団みどり会・井手通雄理事長、酒井隆明市長(左から)

現状と医療需要

小嶋 今後は、重症の高度医療よりも、肺炎や脱水、骨折など、高齢の方に多い病気の対応がますます重要になります。市内で完結できる医療には限りがあります。まずは身近なところで診て、必要な場合に専門医療へつなぐ流れが大切だと思います。

市長 市民の皆さんも、まずは安心して相談できる体制を望まれていると思います。

小嶋 これからは、外来、在宅、介護も含めて、地域全体で支える医療が求められています。

病院の診療体制と医療需要への対応

市長 今後は、ささやま医療センターと岡本病院の2病院が、地域の医療需要に対応するため、協力していただくことが、重要だと考えています。

井手 ささやま医療センターでは、現在の診療科を維持しながら、にき記念病院で行っている診療体制も取り入れていきたいと考えています。また、7月からは年中無休とし、総合診療を大きな柱にしていきます。夜間診療は行いませんが、日曜・祝日を含め、まずはしっかり診て、必要に応じて適切な医療機関へつなぐ体制を整えます。

余田 岡本病院としては、呼吸器内科、循環器内科、消化器内科の専門医をそろえるつもりです。あわせて、血液内科も含め、一般内科も一通り対応でき

る体制を整えたいと考えています。

救急医療体制の現状と課題

小嶋 市内の救急搬送は、年間約2,000件ほどあります。そのうち約1,100件を市内で受け入れ、丹波医療センターを含めると約800件が地域で対応できています。ただ、重症救急は市内だけでは難しく、中等症や軽症、特に肺炎や脱水などをしっかり受け止めることが大切です。

余田 救急隊は、現場の状況を見ながら適切な医療機関へ搬送する、そういった体制は丹波篠山市では整っています。

救急医療への思いと取り組み

市長 皆さんがさまざまな取り組みを進めていただいていることに感謝しています。

余田 これまで丹波篠山市の救急医療は、大きく崩れることなく維持されてきました。今後は、救急だけに頼るのではなく、早めに診て、早めに対応する仕組みが大切です。必要な体制を整えながら、地域で支えられる医療を続けていきたいと思っています。

小嶋 救急医療の負担を減らすためにも、日頃から地域の医療機関が連携し、患者さんの情報を共有できる仕組みが必要です。

2病院に期待すること

市長 市としては、ささやま医療センターと岡本病院の2病院が、市民の皆

さんに信頼される病院として、それぞれの役割を果たしてほしいと期待しています。何でも1つの病院で診るのではなく、必要に応じて連携し、適切な医療につなげる体制をつくってほしいと思っています。

井手 ささやま医療センターでは、これまで兵庫医科大学が取り組まれてきたことをしっかり引き継ぎ、「引き継いでよかった」と言ってもらえるよう努めます。

市長 市民の皆さんにとって、安心して相談できる病院があることは本当に大切です。2病院が協力し合うことで、その安心を支えていただけると期待しています。

市内医療機関の連携と医師会の役割

小嶋 医療は1つの機関だけで完結するものではありません。地域の医療機関が垣根を越えて連携し、市内を一つの病院のようなイメージで、ネットワークをしっかりと作ってワンチームとして対応できるようにすることが大切だと思っています。医師会としては、限られた医療資源を上手に活かせるように、補完し合う仕組みづくりを進めていきたいと思っています。

具体的には、PHR(パーソナルヘルスレコード)の導入を進めています。PHRは、スマートフォンなどを使って自分の健康情報を持ち、必要なときに医療機関へ共有できる仕組みです。医師会と市が一緒に、京都大学のPHR

普及推進協議会とも連携しながら進めています。医療だけでなく介護ともつながる形に発展させ、情報共有をよりスムーズにしていきたいと考えています。

10月には高齢者大学で、11月には市民フォーラムで周知や体験の機会を設ける予定です。ぜひ、ご意見を聞かせていただければと思います。

余田 ネットワークをしっかりと作ってワンチームとして対応できるようにすることが大切だと思っています。その中で、PHRは重要な役割を果たすと考えており、紀洋会としては医療・介護部門含めて協力していきます。

市民へのメッセージ

市長 医療機関、医師会、行政が力を合わせ、安心して暮らせる丹波篠山市をつくっていきます。

小嶋 市民の皆さんにも、地域の医療と一緒に支えていただければありがたいです。PHRのような取り組みも活用しながら、より安心できる医療につなげていきたいと思っています。

井手 ささやま医療センターとしても、市民の皆さんに「ここなら安心できる」と思ってもらえる病院をめざして努力していきます。

余田 岡本病院も、専門性を持ちながら、地域の皆さんに信頼していただける医療機関でありたいと思っています。必要なときに頼っていただけるよう、しっかりと取り組んでいきます。